

## 論文審査の要旨

### 1. 本研究の位置づけ

本研究は就学前の自閉症スペクトラム障がいの子どもの語用障がいについて、その支援に向けての基礎的研究として位置づけられる。子どもの語用障がいに関して、ひとつの相対的に孤立した言語の要素として考える点と言語の全ての側面が統合されたものとする点からこれまで英語圏では研究されてきたといえる (Verhoeven & Balkom, 2004)。後者の場合には、その背景にある認知発達を明らかにすることが必要であり、本研究はその立場に立つ。これまでの自閉症スペクトラム障がいの語用障がいに関しては、特に「心の理論」の発達との関連が指摘されてきたが、本研究は先行研究を踏まえ、まず、定型発達の3歳から6歳の400名以上の協力を得て、子どもの保育場面における語用能力の発達とそれに関わる行動発達との関連性を質問紙調査と事例研究によって時相内・時相間で明らかにした。また、乳児期に遡って、生後8か月頃からの定型発達児とその養育者との行動の縦断的観察から視線、情動の共有、共同動作、ことばと動作との関連づけ、推論的動作、模倣を観点として検討し、動作模倣や推論的動作の語用能力の発達における重要性を示した。さらに語用能力との関連が指摘されている推論に着目し、4歳から5歳児を対象として推論言語について事例的に検討した。このような多面的な観点から検討されたその結果から構成された定型発達児の語用能力の発達モデルは、自閉症スペクトラム障がいの子どもの早期言語発達支援を考える上で意義があり、堅実な成果を挙げた論文である。

### 2. 本論文の特色と評価

因子分析によって、定型発達児の語用能力と認知・行動発達に関連する因子を見出し、横断的資料ではあるが、年齢間の関連性を検討している。例えば、適切な発話交替、指示代名詞の使用、仮定の理解は、3歳から4歳にかけて関連して発達し、自閉症スペクトラム障がいの事例における語用障がいの症状とされる「同意なしの話題変更」は、定型4歳児では興味との関連が示されたが、定型年長児では第Ⅰ因子として語用障がいの症状が集まる因子に移り、他の行動発達との関連性が低くなることを明らかにした。次に臨床的事例検討から、自閉症スペクトラム障がいの事例においては「同意なしの話題変更」や「一方的な発話」は継続するが、プランニング、実行機能の発達や興味の広がりとともに変化がみられ、ごっこ遊びにおける他者との共有などが関係していることを示した点は臨床的支援につながるものとして評価できる。そして、本研究の結果としてまとめられた推論動作や推論言語の発達の観点を含めた包括的な「語用発達のモデル」は自閉症スペクトラム障がいの子どもの語用の発達支援を進めていく上で有効であり、評価できる。

### 3. その他（申請要件充足の確認）

幼児期の語用能力と認知・行動発達—保育場面における質問紙評価から—, 単著, 人間文化, 38号, 25-38, 2015年11月. この掲載論文が学位論文作成要領第4項第2号に該当することを確認した。

### 4. 判定

以上のように本論文は、自閉症スペクトラム障がいの子どもの語用障がいへの発達支援を考える上で大いに寄与する基礎的資料が集積され、臨床発達研究として評価できる論文であり、博士(人間文化学)の学位を授与するに相応しいものと認める。